

## 黙示録16章1-11節 「真実で、正しい裁き」

### 1A 天の聖所からの命令 1

### 2A ラツパの災いの貫徹 2-7

#### 1B 獣の国の住民 2-3

#### 2B 聖徒たちへの迫害 4-7

### 3A 災害を支配する権威 8-11

#### 1B 太陽による炎熱 8-9

#### 2B 獣の座 10

## 本文

黙示録 16 章を開いてください。黙示録の学びは、ついに「神の激しい怒りはここに極まる (15:1)」という所を読んでいきます。16 章全体を眺めたいところですが、第六の御使いによって起こる、ハルマゲドンの戦いについては詳しく見て行きたいので、次回に譲ります。第一の鉢から第五の鉢までを見て行きたいです。幻は、15 章からの続きになりますね。主がヨハネに、巨大な徴をお見せになって、それで神の怒りが地上に降ります。他の使徒たちも意識している、主の日における神の怒りです。パウロは、「ローマ 5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」と言いました。また、「1テサロニケ 5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。」とも言いました。神の怒りが確実に、地上に住む者たち、神の福音を受け入れない者たちに降ります。

これまでも天からの災いが、地上に降って来たのを見ます。けれども、これから見る災いと、今までのが違うのは、神が直接、手を触れられることによる災いです。私たちがこの地上で今、見る災いは、アダムが罪を犯して世界の主導権が人から悪魔に委譲してしまったことによって、起こるものです。地上に呪いがもたらされたからです。そして、悪魔がもたらしているものも多いです。神の主権はそこにありますが、神がそれらの災いを願って下しておられるわけではありません。しかし、神は人間の数々の反抗と、そして彼らを支配している悪魔の仕業に終止符を打つために、究極の裁きとして終わりの日に災いをもたらすことをお定めになっています。

その準備の様子、天における準備の様子を読みました。「15:5-8 その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。そしてその聖所から、七つの災害を携えた七人の御使いが出て来た。彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。また、四つの生き物の一つが、永遠に生きておられる神の御怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使いに渡した。聖所は神の栄光と神の大能から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が

終わるまでは、だれもその聖所に、はいることができなかった。」このようにして、神の聖所から直接出て来た御使いによって、彼らが鉢をぶちまけることによって、地上に災いが下ります。

### **1A 天の聖所からの命令 1**

1 また、私は、大きな声が聖所から出て、七人の御使いに言うのを聞いた。「行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」

ここで読むように、聖所そのものから大きな声がしています。神ご自身が直接、これらの御使いに命令を下しているのです。これはまさに、司令官が他の指令系統を全て飛ばして、末端の兵士に命令を下しているような様です。「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 10:31)」とあるとおりです。

### **2A ラツパの災いの真徹 2-7**

#### **1B 獣の国の住民 2-3**

2 そこで、第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた。すると、獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拝む人々に、ひどい悪性のはれものができた。

主が御怒りを表しておられるのは、「獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拝む人々」であります。獣の国の中に生きている住民がその御怒りの対象です。獣の国に生きている人々は、何をしていたのでしょうか？「13:3-4 その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。そこで、全地は驚いて、その獣に従い、そして、竜を拝んだ。獣に権威を与えたのが竜だからである。また彼らは獣をも拝んで、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言った。」そう、竜を拝んでいた人々です。悪魔を意識的に選び取った人々です。もっと突っ込んでお話しすれば、神の福音を意識的に憎んだ人と言えるでしょう。その背景がテサロニケ第二 2 章に書かれています。「2:9-12 不法の人の到来は、サタンのお働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人々に対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」神を意識的に拒む者たちが、悪魔の偽りを信じ、それで悪魔への裁きに応じて自分たちも裁かれているということです。

既に主は御使いによって、獣の国の住民に警告を発しておられました。「また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「14:9-11 もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の

刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。」それにもかかわらず、彼らは頑なにしているのです。

そしてその災いですが、既に主は、エジプトにおいてこの災いを下しておられました。「出エジプト 9:9-10 それがエジプト全土にわたって、細かいほこりとなると、エジプト全土の人と獣につき、うみの出る腫物となる。」それで彼らはかまどのすすを取ってパロの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と獣につき、うみの出る腫物となった。」かつて神がエジプトに下させた災いは、終わりの日に全世界の規模で行われることの前味であったことが分かります。

3 第二の御使いが鉢を海にぶちまけた。すると、海は死者の血のような血になった。海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。

七つの鉢による災いが、第七のラツパの災いから出て来たことを思い出してください。ラツパによる七つの災いにおいても、海に対する災いがありました。「8:8-9 第二の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分之一が血となった。すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分之一が死に、舟の三分之一も打ちこわされた。」とあります。つまり、三分の二の海はそのまま残っていたこととなります。けれども、第二の御使いによる鉢の災いは、全ての海の中の命が死にます。これが大きな違いです。思えば、東日本大震災の時に、津波の被害において私たちは沢山の被害を受けた地の映像を見ました。けれども現地に行くと分かるのですが、津波が押し寄せてきたところが、目取るように分かるのです。まるで映画のロケ地のようなものでした、津波が押し寄せていないところは、まるで何事もなかったかのように日常生活を歩むことができているようでした。

もし、そのように残されたところがあると、どのような思いが起こるのか？と言いますと、「私はやっつけていける」という傲慢です。神に対する頑なさ、その反抗心が、その災いを受けていない部分を見てさらに強まるのです。雹の災いがエジプトに下った時のことを思い出してください。「出エジプト 9:31-34・・・亜麻と大麦は打ち倒された。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。しかし小麦とスペルト小麦は打ち倒されなかった。これらは実るのがおそいからである。・・・モーセはパロのところを去り、町を出て、主に向かって両手を伸べ広げた。すると、雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった。パロは雨と雹と雷がやんだのを見たとき、またも罪を犯し、彼とその家臣たちは強情になった。」まだ小麦は生えていなかったの、雹の災いを免れたのです、それで頑なになりました。次に主は、いなごの災いを下されます。それで根こそぎ、作物は喰われました。神は、災いを下される中においても、そこに憐れみを示しておられます。彼らを滅びることを最も望んでいないのは、神ご自身です。誰一人滅びることを望んでおられません。ところが、人間の頑なさは、その憐れみでさえ、自分は大丈夫だ、だから神は要らないという強情さをさらに補強してしまう愚かさです。

そしてここで、「海は死者の血のような血になった」とあります。恐ろしい描写ですね、単なる血の色ではなく、死者の血のような血です。そしてこれはナイル川に対する神の災いを思い出しますね。川が血になりました。

## 2B 聖徒たちへの迫害 4-7

### 4 第三の御使いが鉢を川と水の源とにぶちまけた。すると、それらは血になった。

第三の御使いの鉢は、「川と水の源」です。七つのラツパの災いにおいて、川と水源に大きな星が落ちました。「8:10-11 第三の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。」ここでも、三分の一のみが苦よもぎのようになったのであり、三分の二は残っています。水については、私たちは水道水に慣れているので、なぜ水を飲んで死んでしまうのか？というものの感覚が良く分かりません。けれども、浄化されていない水であれば、大抵の場合、飲めば病になります。そして酷い時は死にます。ここではちょうど、隕石のようなものが天から落ちてきたのですから、放射能に汚染されたような状態になったのでしょうか。そして、第三の御使いの鉢においては、先の血になる災いと同じように、血になりました。

5 また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「常にいまし、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなされたからです。

「水をつかさどる御使い」がいるとのこと。主が災いを下す時も、また災いを留めておられる時も、御使いを遣わし、御使いを用いておられることがあるようです。黙示録 7 章においても、14万4千人の神の僕の額に印を押してしまわないうちは、「7:1 四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。」とありました。

そして、御使いが主をほめたたえています。初めに、「常にいまし、昔います聖なる方。」と書いています。他の写本には、「常にいまし、昔いまし、後に来られる聖なる方」となっています。いつまでも変わらずにおられる方、そして永遠に生きておられる方ということです。この方が聖であられ、そしてこれらの災いを下して下さったので、正しいと言っているのです。私たちが黙示録における神の災いを読む時は、神への畏敬と言いましょか、口で軽々しく批評することできない、主への恐れを抱かないといけないでしょう。いわゆる、ホラー映画とか、エンターテイメント的な恐怖を呼び起こすようなことが、神の災いではありません。神の災いには、聖さや正しさに対する人々の反抗への裁きがあるということです。そして、私たちはこの地上において、神のなされていることの正しさが分からないことがあります。世にある不条理、不可解なこと、それらを全てなぜか、理由が知らされていません。けれども、ここで御使いが言っているように、主がなされていることについて、

確かにあなたは正しい方です、と言える時がきます。正しい裁きを見ることが出来るからです。

6 彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。」

「聖徒たちや預言者たちの血を流しました」というのは、獣の国における、イエスの名を守る者たちに対する迫害のことです。「13:10 とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。」「13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」このように血を流させたのだから、今度は、血となった川の水を飲まなければならなくなる、とされています。これが、神が持つておられる公正の基準です。旧約の律法において、「目には目を、歯には歯を」という有名な言葉がありますが、これは目に対して歯を、歯に対して目を、とはならないようにという、裁判官に対する戒めであります。その行なったことへのふさわしい対価を支払うのが、正しいということです。イエス様が言われた有名な戒め、「裁いてはいけません、裁かれないためです。」というのもそうですね。私たちはオバデヤ書で、エドム人に対する神の裁きを読みましたが、人を憎しめば憎まれる、裏切れば裏切られる、高ぶれば卑しめられる、そういう法則を神は立てておられることを知りました。

そして、聖徒たちに対する迫害に対して、神は敏感に報いてくださいます。神の民に対して行なうことに対して、神は正しく報われることは、迫害と困難の中にあつたテサロニケ人に対して語られています。「2テサロニケ 1:4-7 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであつて、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。」主は黙示録の中でも、何度となく、信仰と忍耐が必要であると言われて、それで神が必ず報いてくださることを教えておられます。キリスト者であることが難しい社会にいて、私たちはこのことをしっかりと心に留めて、気落ちしないでいることが大切ですね。

7 また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

ここでの「祭壇」とは、6章9-10節における、信仰のゆえに斬首された人々の声の一つにあります。「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために

殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」この叫びが、確かに、「あなたのさばきは真実な、正しいさばきです」と言わせているのです。祭壇であるのは、火による捧げ物の青銅の祭壇は、神の裁きを示しているからです。もう一つは、七つのラツパの災いの前に、金の香壇があって、そこに「聖徒たちの祈り(8:4)」とあります。聖徒たちの祈りがあって、それでラツパの災いが地上に下っています。

聖なる方であり、また真実な方であるということです。主が裏切らない方、偽らない方、確かに言われたことを果たされる方、ということです。

### **3A 災害を支配する権威 8-11**

#### **1B 太陽による炎熱 8-9**

8 第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。

七つのラツパの災いでは、第四の御使いがラツパを吹き鳴らした時に、太陽の三分の一が光を失ったとありました。ここでは意表を付いて、全てを真っ暗にするのではなく、一度、太陽の炎熱をそのまま地球にもたらすという災いを下します。

太陽の光というのは、私たちの生命の源です。なぜ、ここまで適切な光線をくれるのか？と感心します。暑すぎてもだめ、少なくても寒すぎてもだめです。けれども、次第にこの光線と熱の流れにバランスが崩れています。神が、そのバランスを少し崩されるだけで、炎熱で人々が焼かれてしまうのです。今は恵みの時です。主は、私たちに敵を愛しなさいと命じられて、こう言われました。「マタイ 5:44-45 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」神は今、その恵みの日において人々がむしろ神を拒むという選択をしている者たちに、太陽の恩恵ならず災いを与えられます。ですから、神が敵に対して復讐してくださるし、私たちはその裁きを思って、恐れかすみ、敵や嫌なことをする人をも憐れんで、その人のために祈りますね。

9 こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。

「これらの災害を支配する権威を持つ神」とあります。そうです、全ての自然現象に権威と力を持っておられる方がいます。この方を認めるかそうでないかということが、悔い改めの根幹にあります。神がおられるという、神の主権と力を認めることが、神を信じることの初めです。「ローマ 1:18-20」というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒

りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」

ところが、彼らは、「けがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。」とあります。黙示録 13 章にも、けがしごとを言っている獣の姿があります。これは必ずしも口にして、神を罵ることに限りません。神の存在自体を苦々しく思う心、この方を拒む思い、そしてこのような苦しみに対してさらに神に対して苦々しくなること、このことを話しています。そして、神は理由なしに、苦しみを与えておられません。悔い改めそうなのに、それなのに、何か過ちを犯したから神が酷く扱われるわけではありません。彼らが神への不信を抱いていて、神を拒むことに対して、神が恩恵を与えない状態を、彼らに引き渡すということに他なりません。C.S.ルイスは地獄について、こう言いました。「最終的には、二種類の人がいることになる。神に対して『あなたの御心がなりますように』という人と、神が『あなたの意志の通りになるように』と言われる人とし。」神は人に自由意志を与えられたゆえ、神を拒む者に無理やり神がおられる世界に入れさせることはできないのです。

## 2B 獣の座 10

10 第五の御使いが鉢を獣の座にぶちまけた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。

第五の御使いの鉢ですが、ついに、「獣の座」にぶちまけられます。獣の国の本拠地です。ちょうど戦争で言うなら、国の指令室に爆撃を落とすようなものです。獣の座については、黙示録 13 章でさっきも読みましたが、こう書かれていました。「13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」像があつて、もうひとりの獣が、物が言うようにさせていました。この像を拝まないと殺していたのです。その像自体に、鉢がぶちまけられました。

すると、「獣の国は暗くなり」とあります。なぜかは書かれていませんが、云わば首都機能が麻痺したので、国全体が電気を使えなくなったような感じであろうと想像します。そして暗くなる災いは、もちろん出エジプト記において、第九の災いにありました。

そしてここで大事なのは、「人々は苦しみのあまり舌をかんだ」とあります。この舌を噛むというのは、地獄に堕ちた者たちが、「歯ざしりする」というのに似ているでしょう。「マタイ 13:42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」「8:12 しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです。」燃える火の炉がありますが、大患難では太陽の炎熱です。そして暗闇がありますが、ここでは獣の座がつぶれることによる暗闇です。ま

だ彼らは地上にいるのですが、それでも地獄と同じ災いを受けています。その中で歯ぎしりしています。これは、自分の失ったものに気づいた者たちの強い怒りの反応です。自己中で、自己陶醉型の人が、自分の思い通りにならなかった時の反応です。単なる拷問のような苦しみに耐える姿ではなく、悔い改めず、未だ高ぶり、自分を愛している人々の姿です。